2022年度　大谷大学文藝コンテスト

【エッセイ・小説部門】総評

審査委員長　國中　治

若い人が同世代の人々との切磋琢磨によって、また自分の内面に問いかける真摯な思索を通して、自らの進むべき道を模索し見出し開拓していく物語は、ありきたりといえばありきたりだが、やはり感動なくして読むことは難しい。古今東西、この種の物語が無数に語られてきたのは、それを求める聞き手や読み手が常に存在したからだし、そういう聞き手や読み手はときに別の物語に興味をそそられることがあっても、いつしか当然のようにこの種の物語に帰ってくる。そうしてまた、ありきたりだと思いながらも感動する。迷い悩み戸惑いながらも懸命に生きる若者の姿には、やはり圧倒的な魅力がある。

もし今、これを読んでいるあなたが迷い悩み戸惑いながら生きている若者の一人であるなら、そういう自分が傍目には興味深い魅力的な存在として映っていることを意識してほしい。あなたの生きている物語はあなたが思うほど特別なものではない。しかし、多くの人が関心を持たずにはいられないという意味で、それは間違いなく魅力的で感動的な物語なのである。迷うことも悩むことも、戸惑って立ちすくむことすら、若い日にはそれだけで十分意義のあることなのだ。

今回は新型コロナウイルスが世界中を侵蝕してから三年目であることに加え、ロシアのウクライナ侵攻が理念的にも現実的にも世界的規模で人間社会のバランスを揺るがす最中のコンテスト実施となった。そのためコロナ禍にめげず、というよりコロナ禍を逆手にとって、今でなくてはできない高校生活を満喫しようと工夫を凝らす若者や、戦争や国家といった巨大な力に個人がどう対応すればいいのか、という問題に思いを致した若者が、自らの行為や思考を記したエッセイを寄せてくれた。コロナ禍についてもロシアのウクライナ侵攻についても、識者の見解が日夜マスコミを賑わせている。だが若い人たちはそうした専門家の言を検討するより、自分自身の感性と知性が求めることに忠実であろうとしているようだ。ここに専門家の知見が加味されたならば、といささか残念に思わないでもなかったが、自らを信じようとする若者の姿勢はやはり瑞々しく、魅力的なのだった。

今回は若者と大人との交流を描いた作品も印象に残った。小説、エッセイ両部門の作品に、大人との交流によって新たな世界観を獲得する若者たちがいた。もちろん昨年度までの応募作が大人ぬきの物語ばかりだったわけではない。おじいさん・おばあさんとの触れ合いが丁寧に綴られた佳作は何篇もあった。だが今回目についたのは、おじいさん・おばあさんより若い世代の大人、つまり高校生から見ると親の世代か、それより少しだけ上の世代に属する大人たちが、若者たちに何らかの影響を与える作品群である。おじいさん・おばあさんと若者。親の世代（＋α）の大人たちと若者。両者の違いはどこにあるか。前者は自分との隔絶を互いに承知している。だから共感の難しさを前提とした上で相手と向き合う。一方、後者は世代間の格差が不安定で、ある場合には隔たっているが、ほとんどズレがない場合もある。だから場面や対象が変わる度に、相手と自分との感覚・価値観の違いやその度合を測りながら振る舞わなければならない。実に面倒である。おじいさん・おばあさんとは穏やかな安定した関係なのに、親とは喧嘩ばかり、という若者がいるのは無理からぬことなのだ。しかしこういう面倒な関係にこそ、人間の心の機微を追求する文学の本質が潜んでいることに多くの人は気づいているはずだ。

最後にお願いが一つ。今回は審査の過程で剽窃の問題が浮上した。類似点があるにせよ当該作には独自の工夫や優れた表現が認められるという声が大勢を占め、選考の対象となった。だが、内容・表現ともに酷似する箇所が複数認められたため選考から外さざるを得なかった作品もある。選考対象とするかしないか、境界線を引くのは至難である。私たち審査員の責任はいうまでもないが、応募する方々にも誠意ある取り組みをお願いしたい。